

モルト

死が遠ざかってゆくにつれ
生もまた遠ざかってゆく
取り残された僕が霧消してゆく

僕を覆いつくす憐れみが
陶酔に満ちた外界を、まるで
蜘蛛の子を散らすように、逃亡へと駆り立てる

四方を取り巻き、沈黙する
本質的に同一な被造物たち
まるで鏡だけに取り巻かれているような 部屋

唯一の扉がそこにある
僕はそのノブをひねり
扉を開けて部屋を出る...ようこそ

巨大な蒸留釜が息づいている
パイプラインを通じて、間断なく
世界中から吸い寄せたエキスを呑み込んでいる

蒸留されたモルトからは、
懐かしげな、それでいて空疎な香りが漂っていた
飲む気も失せるような芳香が

杜氏は哀しげに答えたものだ
「長いパイプラインを通っている間に、
いかにしても変質してしまうのじゃよ」

僕はいつそのことパイプラインを辿って
その吸い込み口まで行きたかったが
杜氏はそれを許さなかった

部屋に戻った僕はその、気抜けしたモルトを口に含み
朦朧とした意識のなかで、
絶望的に、生と死という兄弟を呼び寄せようとした

(2004.7.23)